Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-13

兵庫県美方町の観光開発への１つの試み：ミニ独立国方式の可能性

白石，太良

(Citation)
兵庫地理,42:1-7

(Issue Date)
1997-03-31

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002410

兵庫県美方町の観光開発への１つの試み

― ミニ独立国方式の可能性 ―

白　石　太　良

美方町には，過去３年間ゼミ学生の地域調査実習でお世話になった。その間，夏期休暇中に行った実習期間だけでなく，個人的な調査で訪れる機会もあり，過疎に悩む中山間の，いわばごく普通の農村が観光開発により活性化をはかろうとする姿を見聞することができた。その結果としての提言といえば聞こえはよいが，このような見方もあるのではないかとの意味で，問題点の指摘とミニ独立国運動とを結びつけた１つの試みを述べてみたい。

1　美方町の概要

兵庫県美方郡美方町は，兵庫県の北西部，但馬地方のうちでは西に位置する農牧業と林業の町である。町域の周囲に山々がつらなり，そのなかにはスキー場で知られる鉢伏山をはじめ海抜1000㍍を超える山も多い。町内には吉滝や小代渓谷など美しい自然が残され，南部は氷ノ山後山那岐山国定公園になっている。面積約66平方㌔の町域は，東西７㌔，南北14㌔で，山麓に開けた細長い盆地の中央を矢田川が南から北へ流れている。山陰型気候区に属して冬季の積雪が多く，２月の積雪量の平均値は70㌢を超える。しかし，月平均気温でみる限り氷点下になることはなく，逆に８月には30℃に達することもある。

美方町は古く「和名抄」では小代郷（庄）と呼ばれ，南北朝期に山名氏が但馬に入って以降，明治期を迎えるまで山名一族の統治が続いた。明治22(1889)年市制町村制施行により小代村が発足，昭和30(1955)年小代村と射添村が合併して美方町が誕生したが，同36(1961)年に旧射添村を村岡町に分離した。したがって美方町は，古代以来の歴史的領域が現在まで踏襲されていることになる。

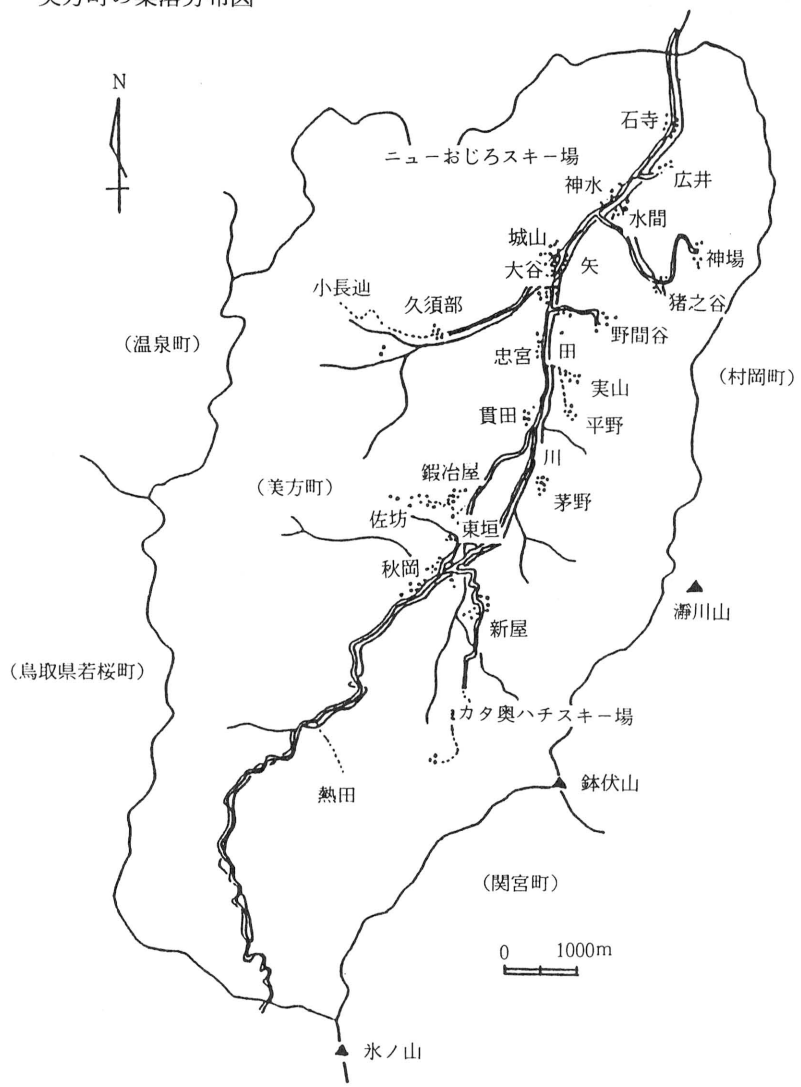
平成６(1994)年７月１日現在の人口は2,775人で，兵庫県内では最少人口の過疎の町である。昭和40(1965)年には4,296人であったので，この約30年間で３分の１以上の人口が減少したことになる。その多くは流出によるものであるが，近年は自然増加もマイナスを続け，これに伴って老齢人口の割合が30㌫に近づく一方で年少人口は総人口の15㌫にすぎなくなった。

集落は矢田川沿いの低平地に南北に点在するほか，河川から50㍍程度の比高をもつ山腹の平坦地に立地する。集落数は22で，養護老人ホームの設置をみた１集落を除いて他はすべて人口減少をみせ，なかには最近になって廃村化したものもみられる。町役場をはじめ公共機関や商店などの集まる大谷が町の中心であり，人口も約400人と最大の集落となっている。

町の面積の約90㌫を山林が占めるが，主産業は農牧業である。この地で改良を重ねられ山間地を利用して飼育されてきた但馬牛の飼育に特色があるほか，近年は高原を利用した高冷地野菜の栽培も盛んになっている。古くから京阪神方面などへの酒造出稼ぎ者が多く，その伝統は今に続くが，最近は通勤兼業で八鹿や養父方面へ通う人も少なくない。観光産業も盛んで，スキー場が造られ，それに伴って民宿経営も盛んであるほか，交流人口の増加を図るための町営温泉施設「おじろん」も開館した。

交通路は，大正12(1923)年ごろに県道村岡・若桜線（現国道482号）開通，昭和11(1936)年には全但バスが大谷～和田（村岡町）間で

美方町の集落分布図



運行を始めた。現在は八鹿から村岡を経て町内の秋岡まで乗り入れているが，自家用車の普及によりバスの利用者の減少が著しい。もっとも，自家用車の利用により買い物行動の範囲が拡大，生活必需品の購入には温泉町や村岡町の商店，さらには鳥取市や八鹿町のスーパーマーケットなどへ出掛けるようになっている。

2　観光開発の問題点

人口の減少と高齢化の進む美方町では，産業構造の変化のなかで主産業の農林業には多くを期待できず，但馬牛もまた規模の上から競争力を失っている。酒造出稼ぎは現在もなお主要な現金収入をもたらせるが，町民経済に占める割合は必ずしも大きくはない。好むと好まざるにかかわらず，地域を活性化させ，その再生をはかることは美方町にとって急務の課題なのである。

このような状況のなかにあって，美方町が観光開発に活路を見いだそうとしたのは１つの選択であった。降雪という自然をいかしたスキー場開発がその代表であるが，ほかに残酷マラソンやツチノコ探検といったイベント

の開催，温泉の掘削，大阪府忠岡町・兵庫県尼崎市と連携した休養施設などの建設，スッポン養殖による特産品づくり，ふるさと小代協会による都市・農村交流なども，地域振興のねらいを観光開発においた事業ということができる。

これらの観光開発は，個々には評価は別れようが，一応の経済的効果をもたらせたととらえられている。とはいえ，それによって地域活性化が成功したとみてよいか，あるいは地域づくりがなされたかとなると問題は別である。もちろん，観光開発が必ずしも雇用力創出にならないこともあって，定住人口の多少により地域活力をみる立場はとらない。しかし，少なくともその効果が町内全域に及んでいるとの認識を住民すべてがもち，連帯意識の向上，アイデンティティの確立，ここで暮らす喜びなどといった住民の意識変革に寄与し，活気のあふれた「地域」（ここでは，住民集団がその生活行動の継続により生きる舞台として獲得し，自己の存在を主張するとともに誇りをもって暮らしを営むひろがりととらえる。これを生活空間と呼んでもよい。）の再構築に寄与したかという視点から見る限り，まだ不十分といわざるをえない。

かって筆者は，美方町の観光開発における問題点を整理したことがある（拙稿：「観光開発による過疎山村の活性化－奈良県下北山村と兵庫県美方町－」兵庫地理40号 1995年）。そこであげた事項に補足を加えながら要点を述べてみよう。

その第1は施設設備に関してである。観光施設の中核にあるスキー場は，同程度の規模や施設のものは他にも多く，地域間競争に勝てるかどうかが問題である。宿泊施設も，民宿に依存する現状では，アフタースキーまで含めての期待に答えにくい。スポーツ合宿に使われるおじろドーム，温泉保養館おじろんを含め，地域全体を観光施設とみる考え方が求められることになる。

第2の問題点は集客についてで，京阪神地方からの客が近隣のスキー場にとられ，必ずしも入り込み客が多いとはいえないことがあげられる。日帰り客を主とすることや入り込みの季節性などとともに，観光産業は観光客を集めてはじめて成り立つ産業であるので，検討のいる課題は多い。

第3は地域社会との関係である。観光・宿泊などの施設が大谷地区に集中して町内に地域間格差を生む恐れがあり，スキー場が必ずしも雇用力確保にはつながらない，地場産業と観光との結合が十分でない，などが問題点である。観光開発が地域活性化の手立てとなるには，それが地域社会の各分野と結びつかなければならない。

観光開発に対する住民の理解と協力は，問題点の第4といえよう。住民自らによるスキー場開発は地域資源の乏しいなかでの1つの方法ではあるが，スキー場からの遠近による経済的な町内各地区間格差に加え，住民の職業や階層の相違による意識差をも生み出すことになる。観光開発は一部住民や一部地区に利するのみという考え方をいかに改めるかが問題である。

3　観光開発の考え方

全国各地の過疎地域で，活性化の方策として観光開発が取り上げられるようになって久しい。その多くは，人目をひく施設の充実とかイベントの開催などであって，いわば点としての観光開発となっている。美方町でいえばスキー場の整備や残酷マラソンなどがこれに当てはまり，それ自体がある程度観光客を呼んでいることは事実である。

とはいえ，それら一つ一つの施設や行事がもたらす効果は町内の特定の場所に限られているし，一時的なものであることも多い。しかも，観光客は個々の施設の利用や行事への参加と見物に訪れるのであって，類似した施設・行事が美方町以外でみられたならば，良

し悪しを判断して，他の場所へ出掛けてしまう可能性もある。大切なのは，美方町であるから訪れてみたいという観光客を増やすことである。このことは，施設・行事の地域間競争に勝てば良いというのではない。むしろ逆であって，施設・行事で観光客を呼ぶのではなく，美方町そのものが観光客を引き付けるのでなければならい。

それには町自体に魅力が必要となるが，現在の美方町にそれがあるといえるであろうか。ごく普通の中山間農村の１つというのでは，観光客はなにも美方町へ訪れなくともよいのである。

観光客が観光地へ出掛けるのは非日常の場所を求めてのことであるから，著名な観光資源があるか人目を引く施設があるのでなければ，地域全体を非日常の世界に変える以外にはない。

例えば，町のすべてが昔の懐かしい田舎の景色と暮らしであればどうであろうか。わらぶきの屋根の家，昔ながらの道具や衣服，緑の田畑と山並み，伝統を生かした食べ物などは，人々に日本人の原風景を思いおこさせることであろう。もちろん，実際の生活を昔の通りのものにもどすことはできない。しかし，景観上の修景は不可能ではないし，特定の場所に限れば，かっての暮らしの復元をしてみることもできると思われる。

ここであげたのは，町全体を野外の歴史博物館か民俗博物館にしてはどうかということである。周りを壁で囲まれたなかに静態保存された民家群などではなく，また建物のなかに陳列された道具類などでもない，いまなお生き続ける「地域」が保存された博物館は，周りの草木や山・川などと一体となって，総合的でダイナミックな暮らしの博物館としてその存在を自己主張することができるであろう。

このような，いわば町のすべてを日本の伝統的農村をコンセプトにしたテーマパークにするというのは，非現実的とのそしりを受けるかもしれない。だがしかし，都市化と社会の非人間的な組織化が進み，人工的環境のなかで圧迫と挫折，多忙と苦悩に囲まれて暮らす日本人のすべてが求める安らぎは，心に描くふるさとへの思いをおいてはない。このことが，観光客に魅力ある場所として受け入れられるのではないか。

もっとも，町全体を観光地にするという考え方での事業展開は急にできるものではない。とはいえ，第三者としてあえて言えば，それぞれの事業が個別に進められ，全体としての関連性が見えていないように思われる。既設の観光施設をみても，駐車場不足のニューおじろスキー場，高い入浴料の温泉保養館おじろん，一般観光客に無縁のおじろドーム，観光客の実態と遊離したレストラン石楠花など，いずれも何らかの問題点があるが，トータルとして機能すれば「地域」そのものが観光地となる可能性をもつのであって，この点からも全体像の欠如がおしまれる。

降雪以外に特に観光資源を持たない町村として（降雪も美方町に特有のものではない），観光客の誘致により活性化をはかるにはそれなりの主張が必要である。さらにそれが，「地域」としてのまとまりの再生にとって意味を持つことが説明されなければならない。ここに，美方町を一つの地域単元，いわば一種の「独立国」と見る考え方を検討する意味がある。

4　ミニ独立国運動

地域活性化策の１つとして，ミニ独立国運動がブームを生んだのは1980年代後半のことであった（拙稿：「ミニ独立国運動による地域づくりの現況」流通科学大学論集－人文・自然編３巻１号，1990年）。ミニ独立国はパロディ王国ともいい，自らの地域またはグループを独立国と称し，その組織や運営を国家のパロディにより展開することによって，地域

の振興やアイデンティティの確立を求める運動である。ネーミングの面白さやユーモアあふれる諸活動などによるパブリシティ効果に期待した面も大きかったが，地域活性化への一種のショック療法として，また，自らの地域を再確認する手段の１つとして評価された（地域づくり編集部編：「ミニ独立国－いま流の地域活性化手法－」地域づくり17号，1988年）。

もっともその後，マスコミが取り上げなくなったこと，建国に意義のあった一過性のミニ独立国が廃国されたこと，パロディ風展開から脱皮した国家がでてきたこと，遊びの要素への批判があり関係者の努力に限界がみられたこと，なによりも活性化策の多様化が進んだことなどにより，その活動数を減らしてゆく。しかし，閉国や廃国したミニ独立国は，この運動に即効性のある経済的効果を期待したものであった場合が多く，ことに，観光客誘致，イベント開催，特産品販売，企業イメージづくりなどといった単一目的で結果を求めたミニ独立国では衰退が早かった。これに対し，運動を継続するミニ独立国は，地域の歴史や文化あるいは風土へのこだわりをもち，なぜミニ独立国なのかの目的意識，いわば哲学があり，地域住民との連帯と地域に根差した活動を行い，経済的効果は結果であるとみなし社会的・文化的側面を重視するといった特徴があった（拙稿：「地域づくり型ミニ独立国運動の変容(Ⅱ)」流通科学大学論集－人文・自然編５巻１号，1992年）。これらの特徴は，1997年の現在においても共通しており，活発な活動によって，その成果が現れつつあるミニ独立国も各地にみられている。

「地域」は，すでに述べた通り，そこに住む人々がその生存をかけ，自然的諸条件と取り組みながら歴史的に築きあげてきた生活空間である。そこには人と人とのつながりがあり，地域文化や郷土愛といった精神的まとまりがある。経済的活動が生活の基礎条件として必要なことはいうまでもないが，何よりもそこが人々の暮らしの舞台であることが重要であろう。したがって，ミニ独立国の地域へのこだわりは，自らの生活空間の再確認と再構築のための運動として位置づけられる。その意味で，ミニ独立国運動は「地域」を「国家」という総合的な空間表現で示すことによって，自らの存在を問い続ける運動ということができる。

もちろん，現代の「地域」は，それのみで完結して存在できる小世界ではありえない。他地域との交流，とくに都市との交流が，観光や物産，流通活動，あるいは文化的・人的交流の形をとって進められる。しかし，これらも，自らの自己存在を確認することなしに行われるのであれば，地域づくりがなされないのみならず，「地域」自体の否定にもつながりかねない。地域間交流は，生活空間としての「地域」の暮らしの向上，ひいては地域文化の向上のための手段の１つと考える必要がある。交流による経済的効果は，結果であって目的ではない。

このような地域づくり型ミニ独立国運動は，美方町の観光開発にあたっては総体としての「地域」の視点が必要との前述の見方に当てはめたとき，重要な示唆を与えてくれるように思われる。

5　美方町のミニ独立国化

先に述べた通り，美方町は地形的にまとまりあるひろがりを形成しており，歴史的にも古代以来の歴史的領域を踏襲した町域からなっている。河川沿いを通る国道482号は，南端部が未整備なため，北端で国道９号に結ばれるのみで人々の流動は制約を受ける。したがって美方町域は，自然環境からも，また歴史的背景からみても，さらに現在の交通体系の点でも，独立した地域単元とみることができよう。

これらが要因となって閉鎖性をもたらせ，

それが地域発展を阻害するとの意見もあるが，見方をかえれば，その故にこそ「地域」の自主性と独自性を発揮し得るといえなくはない。すなわち，美方町をミニ独立国とみる立場をとり，疑似国家的に「地域」をとらえるための有効な地理的かつ空間的ひろがりをなしているのである。

ミニ独立国運動は，いうまでもなく一種の遊びであって，文字通りの独立国を建国するのではない。とはいえ，単に仲間がグループをつくって遊ぶのではなく，地域づくりにゆとりをもって取り組むために，さまざまな活動にユーモアの衣を着せ，その舞台を国家と表現して楽しみのなかで行動しようとする運動である。表に現れた形は面白さであるが，本音は真面目ということになる。

それでは，具体的に美方町でミニ独立国運動を進めるにはどうすればよいか。

国土（領域）は決まっており，国民（住民）も存在するのであるから，残るは主権（活動のあり方）と実際の行動である。パロディ風展開のために，ユーモアに富んだ国名を決め，国旗を作り，できれば国歌も作成してイベントその他の事業は国家の名のもとに行う。憲法もあったほうがよいし，閣僚の任命，それに似合った服装なども大切となる。建国式や国会，国民体育大会などといった行事の開催，国会議事堂・首相官邸・各種省庁や国境などに看板を立てる，パスポートや国土案内図を発行するなども必要であろう。経費が問題になるが，税金（会費）を徴収するか雑収入（寄付金）によらざるを得ないかもしれない。

このような国家をパロディ化した活動は，話題性や知名度の上昇，それによるある程度の観光客増加などが見込めるとしても，観光開発の切り札になるわけではない。重要なことは，結果として地域づくりになるかどうかである。

遊びに対して拒否反応を示すのが日本人の習性であることは否定できない。しかし，観光開発に１つの方向性を見いだし，町全体を日本の伝統的農村の歴史的・民俗的博物館として生かすことにより観光客誘致をはかる場合，その自立性を「国家」と表現するのも方法として許されるのではないか。この場合，観光開発についての公約をかかげたミニ独立国の首長や議員・閣僚などを公募をする，これらを実際に選挙してみる，その際の選挙権は税金納入者とか子供や高齢者に限る，あるいは女性議会や子供議会にして議論をするなども，観光開発への住民の認知につながるかもしれない。観光に関するアイディアのコンテストを行い，実際に資金を渡して実行させてみるなども考えられる。いずれもユーモアと遊び心からの活動ではあるが，パロディであっても単なる「ふざけ」ではないことを人々に理解してもらう活動と思われる。しかも，広く町内各層の人々を巻き込むことによって，１人１人が主体的に「地域」のあり方への議論に参画することとなり，結果的には意識の集約につながるのではないか。

ミニ独立国は，地域活性化において，「地域」のまとまりを主張する手段であって，その一体性を自らが意識し，他に対しても強調するために組織されるものである。観光開発において，町のすべてをテーマパーク化し，そこに日本人の原風景ともいうべき空間（現代人からみれば心のどこかで求めている非日常の空間）を造るには，ムラのたたずまいの景観とともにいきいきとした暮らしが求められる。そのためには，自立した「地域」という自己存在をアピールする必要があり，ミニ独立国は少なくとも疑似的にはその存在を主張できるであろう。

観光諸施設の連携においても，それぞれの施設をミニ独立国の国営という位置づけでみることにより，意識の上でのシステム化は可能となる。各種イベントもミニ独立国の主催とすれば，開催意図の理解を得やすくなる。これらは，観光諸施設や観光資源，イベント

などがトータルとして機能する必要性を住民に認識させることにつながり，町全体の観光地化が美方町の活性化の方向性であるとのコンセプトの形成へとむすびつくのではないか。大谷地区を観光開発の核地区にするという考え方も，ここが首都であるとの立場からとらえてみることができる。

ミニ独立国の組織をどうするか，財政はどうなるのか，施設や行事をパロディにいかにつなげるかなど，実際の運営についてはここでは何も述べていない。しかし，美方町の地域活力をつけたいという願いのなかで，これらはむしろ枝葉末節といってもよく，大切なのは，住民が「地域」のまとまりを認識するに当たってのしかけとして，ミニ独立国という意識の醸成が必要であるということなのである。

6　地域個性の主張　－まとめにかえて－

地域づくりには，地域の特性を生かすことが最も重要であるとされている。このような特性，いわば地域らしさは，長い間の人々の営みのなかで育まれてきたものであって，その風土と強く結びついたものである。したがって，地域づくりのためには，「地域」の自然や歴史を知り，その上で展開される社会的・経済的活動に着目し，自己の存在を主体的に主張することが必要となろう。ミニ独立国運動は，このような「地域」をみつめる目を「国家」というパロディ化された切り口においた運動であって，面白さに特化した活動展開に目的があるのではない。すなわち，「独立国」と名乗ることによって生活の舞台に注目しようとする姿勢，あるいは思想方向を示す社会運動なのである。ミニ独立国を活性化の手段とみるのではなく，「地域」自立の表現方法として眺めた時，この運動の評価が浮かび上がると思われる。

観光にもさまざまな形態があるが，ごく普通の農村が既成の著名な観光地や大資本による観光施設と同様の開発形態をとったのでは，いうまでもなくたちうちができない。さらにまた，全国各地の農村が行う観光開発と類似した手法では，地域間競争に勝てるとは限らない。

美方町のように，日本のどこにでもある農村にとっての観光開発は，「どこにでもあるもの」そのものを生かすことでなければならない。それには，いま現実に存在するものではなく，あると思うのに実際には見られないもの，言い換えれば，あると思い込んでいるものを作り上げることが求められると考える。その１つが，一昔まえの懐かしい日本のふるさとであり，その風景とそのなかでのいきいきとした暮らしであろう。人々は，そこに身を寄せ，体験することによって，落ち着きと感動をおぼえ，明日への活力を取り戻すことができる。ミニ独立国運動は，このような観光開発の方向性の主張にあたって，どこにでもある農村ではあるが，かっての村落に見られたようなまとまりある「地域」をなしていることの意識の集約とその表現に利用できる可能性を持っている。ともあれ，美方町において観光開発に焦点を当てた地域づくりを模索する場合，この方式が一層有効に働くであろうことを指摘したい。

（脱稿後，町立中学校の木造校舎を国際工芸村にしてはとのプランを知った。地域像のなかにいかに組み込まれるのかを見守りたい。）

（しらいし・たろう　流通科学大学）